

聖書：ルカの福音書 19：1～10

説教題：捜して救うために

日時：2022年12月25日（クリスマス記念朝拝）

先の子どもにも分かりやすいお話で、イエス様誕生の第一報は野宿で羊の夜番をしていた羊飼いたちにもたらされたという話を見ました。当時の社会の中で疎外されていた人々、見下されていた人々に「あなたがたのために」と福音は差し出されました。これから見るザアカイの話も同じです。彼は神の救いから最も遠いところにあると思われていた種類の人でした。しかしイエス様は今日の箇所の中で「人の子は、失われた者を捜して救うために来たのです」と語られます。この記事を通して、イエス様がクリスマスの時に来てくださったことは何なのか、また今なおしておられることは何であるのかに思いを向けたいと思います。

さて話の舞台はエリコという町です。イエス様はこの時、エルサレムに向かって最後の旅をしていました。エルサレムの都では十字架の死がイエス様を待っています。その都に入る直前の町がエリコでした。イエス様はそこで取税人のザアカイという人に会います。取税人とはローマのために税金を取りたてる役人のことです。ユダヤ人からすれば、それは異邦人の手下になって同胞から金を巻き上げる裏切り者、売国奴でした。しかも人々から集めたお金の内から着服する者が多く、裕福な人たちが多くいました。とても受け入れられません。さらにザアカイは取税人の中でもかしらでした。一体どれほどの汚い手を使って、その地位まで上り詰めたのか。悪人中の悪人、罪人の中の罪人として人々から毛嫌いされていたことでしょう。当然のごとく彼は「金持ちであった」と2節に記されています。

そんな彼はある日、イエス様がこのエリコの町を通ろうとしているという知らせを聞きます。すると彼はどんな方かを見ようとしました。なぜ彼がこのような思いを持ったのかは書かれていません。考えられるのは、イエス様は他の宗教指導者たちとは違って自分たち取税人も含め、社会の中で見下されている人を差別せず、むしろ積極的に交わりの手を差し伸べ、罪からの救いを教えておられるというニュースを聞いたということです。しかもイエス様の直弟子12人の中には元取税人、すなわちマタイも混じっているという話も知っていたかもしれません。さらにザアカイは取税人のかしらでしたから同業者の情報は良く知っていたでしょう。そんな仲間の中にはイエス

様に出会って、その生活が変えられた者もいるという話も聞いていたかもしれません。ザアカイはイエス様が「どんな方かを見ようとした」とあります。これは直訳すれば「イエス様を見ることを求めた」という表現です。この話はザアカイがイエス様を求めたというところから始まります。

しかし事はうまく運びません。すでに通りは黒山の人ばかりで、ザアカイはその中に入っていくことができませんでした。入ろうとしても、きっと入れてもらえなかった。さらに恨めしいことに彼は「背が低かった」と書いてあります。ここから彼の色々複雑な思いを多くの人々は読み取ろうとします。普段お金を沢山持って威張っていても、この肝心な時にどうにもならない自分の小ささを思わされるザアカイでした。しかし彼の素晴らしい点はあきらめなかったことです。彼は並々ならぬ熱意を示します。この場所が混雑しているならと彼は前方へと走って行きます。大金持ちの取税人のかしら走って行く姿を思い浮かべただけでも滑稽ですが、さらに彼は何といちじく桑の木に上ってしまいます！まるで子どものような行動です。そこまでしてザアカイはイエス様を見ることを求めました。恥も外聞もかなぐり捨てて、とにかくその方を見たいと彼は求めました。

そうしてついにイエス様がそこを通り過ぎようとした時のこと。ザアカイにとって驚くべきことが起こります。イエス様は何と突然上を見上げました。隠れてひそかにイエス様を見ようと思っていただけの自分なのに、突然イエス様に見つめられてしまいます。しかも「ザアカイ！」と呼びかけられます。彼はびっくりして木から転げ落ちそうになったのではないのでしょうか。なぜイエス様は私の名を知っているのか。名を言い当てる、あるいは名を知っているとは、その人自身を知っていることを意味します。ザアカイはこの瞬間に思ったことでしょうか。私はこの方に知られている。この方は私を心に留め、私を全部知っている。そればかりか、「急いで降りて来なさい。わたしは今日、あなたの家に泊まることにしているから」とまで言われます。普通の人初対面でいきなり、「私は今日、あなたの家に泊まることにしている」と言ったら、私たちはどう思うでしょう。そんな話は聞いていない！こちらの都合も聞かずに何と非常識な！と立腹するかもしれません。しかしザアカイにとって、イエス様のことは全く違った響きを持つものだったと思います。「家に泊まる」とは、その人と親しく交わることを意味します。食事をともにしながら語り合う時間を持ちます。それは親しい関係でなければいけないことでしたし、それは相手を信頼している証しでもあり

ました。そうだとすればザアカイにとってこれは信じられないことです。誰も自分をこのように求める人はいません。誰も自分をこのようには信頼していません。ところが何とイエス様が、神の救いの世界を説いている方が、こんな私のところに来てくださる。これはイエス様が私をも神との交わりの世界に引き入れてくださるということ以外の何物でもありません。イエス様はこんな私をも認め、受け入れ、祝福へと招いてくださっている。そのことを感じたザアカイは「急いで降りて来て、喜んでイエスを迎えた」と6節にあります。ここにザアカイは初めてお金や地位を持つことによっては得られなかった真の喜びを味わい始めます。それは神との交わりに生きる喜びと言えます。今あるままの自分を認め、受け入れ、愛してくださる神を知り、その神とともに歩む喜びと言えます。

そんな中、彼は背後に厳しい声を聞くことになります。7節：「人々はみな、これを見て、『あの人は罪人のところに行って客となった』と文句を言った。」これはザアカイの心に突き刺さる言葉だったのではないのでしょうか。人々の言っていることは正しいものです。反論できません。そのように後ろ指を指されても文句の言えない生活を自分はして来ました。果たしてイエス様はどうされるのでしょうか。そんな罪人なら彼の家に行くのはやっぱりやめようかとされるのでしょうか。しかしイエス様はそうなさいません。なおともにいてくださいます。しかしこのままではイエス様に不名誉が帰されてしまいます。現にイエス様が非難されています。私の悪のためにイエス様が責められています。

そのことを思った時、ザアカイはそのままでいることはできないと思いました。彼は8節で立ち上がり、主にこう言います。「主よ、ご覧ください。私は財産の半分を貧しい人たちに施します。だれかから脅し取った物があれば、四倍にして返します。」すでにしてしまった過去は取り消せません。しかし彼はこれからは新しい生活をしたと願いました。そしてまず、貧しい人たちに財産の半分を施すと言います。当時、持ち物の20%を施しに用いることは寛大なことである。しかしそれ以上は常識的ではないとされていたようです。ところがザアカイは20%をはるかに超えて50%を施すと言いました。さらに「だれかから脅し取った物があれば、四倍にして返す」と言います。これは自分としてはそんなことをした覚えはないが、万が一そんなことをしていたらという意味ではなくて、実際にそうしていたことを踏まえた言葉です。全員にそうしていたわけではないが、脅し取った人に対しては4倍を返しますと。律法の中

には、たとえば民数記5章7節に、人に不正を行った場合、償いとして総額を弁償し、それにその1/5を加えて支払わなければならないと定められていました。つまり1.2倍にして返すということです。ところがザアカイは1.2倍ではなく、4倍にして返すと言います。そんなことをしたら金持ちのザアカイでも手元にほとんど残らなくなるのでは？と思います。しかしザアカイの中ではすでに大きな価値観の転換が起きていました。彼はこれまで人生の祝福はお金にあると思っていました。ですから多少汚い手を使って人を押しつけてでも、お金と地位を求めて来ました。しかしイエス様を知り、神の愛を知って生きることに比べたら、それらははるかに小さいことでなくなりました。それよりも私を愛してくださるイエス様に不名誉が帰されることがないように生きたい。そして神に喜ばれるように正しく生きる者になりたい。そのように願う者となったのです。これが悔い改めです。生き方の方向転換です。彼はこれを強いられてではなく、自分から喜びをもって行ったのです。

これを見てイエス様は9節で言われました。「今日、救いがこの家に来ました。この人もアブラハムの子なのですから。」イエス様は確かに救いをもたらすために来られました。そしてザアカイがその救いを真に受け取ったことは、彼が今示した悔い改めの行動の内に明らかにされました。これを見てイエス様は今日、救いがこの家に来た！と仰ったのです。また救いが「この家に来た」と言われていることも注目し値します。「この人に来た」とは言われていません。聖書の救いは単なる個人的なものではありません。一人が信じるなら、その家にも、その家族にも、神の救いが来るようになる。神はそのように私たちの家族を見ておられるのですし、またそのように扱ってくださることがここにも暗示されています。

そして10節で「人の子は、失われた者を捜して救うために来たのです。」と言われました。ここから最後に三つのことを心に留めて終わりたいと思います。一つ目はここに私たちはイエス様が地上に来た目的、すなわちクリスマスの目的を改めて知ることです。それは「失われた者を救うために来た」ということです。今日の箇所ではイエス様はザアカイの家に泊まることにしてあると言われました。これを聞いて本人もびっくり、周りの人もびっくり。なぜあんな人のところに？と。しかしここに私たちはクリスマスの出来事と重なるものを見るのではないのでしょうか。イエス様がザアカイの家に入って行かれたように、イエス様はこのクリスマスの時、人となって私たちの世界へと入って来てくださいました。それは「失われた人を救うため」です。

私たちはみな失われた者であったと聖書は語ります。それは神の前から失われているということです。ザアカイはそうして富と腐敗の中に失われていました。しかしそんな私たちを救うため、神との正しい関係に回復させるため、そこにある喜びといのちに回復させるために、イエス様は来てくださいました。そのことをこのクリスマスの日、この記事を読んで感謝したいと思います。

二つ目は、私たちに与えられる救いはただではないということです。イエス様はザアカイの家に行くために人々から非難されました。ご自分の評判を落とすことと引き換えにしてでなければザアカイに救いの祝福をもたらすことはできませんでした。しかしイエス様はそのような犠牲をご自分が一人払うことを厭わずに進んでくださいました。このクリスマスも同じです。神であるキリストはこの時、ご自分を無にして私たちのところに入って来てくださいました。そして犠牲を厭わずにザアカイの家に入ってくださったイエス様は、この後、十字架の死にさえも進まれます。「失われた者を救うため」という目的のために、どんな代償をご自分が支払っても、その道を進まれたイエス様のお姿を今日の箇所にも見て、イエス様に感謝と賛美の礼拝をささげたいと思います。

そして三つ目に今日の箇所で強調されているのは、イエス様がザアカイを捜してくださったということです。話の初めの方ではザアカイがイエス様を求め、イエス様を捜した様子が描かれました。しかし最後の 10 節には、本当に求め、捜したのはイエス様の方であったと言われています。私たちも信仰告白に至るまでには色々な経過があったと思います。その中には自分がイエス様を熱心に求めたという面も確かにあったでしょう。それは必要なことです。しかし今日の箇所から教えられることは、私たちが救いにあずかったのは私がイエス様を求めた以上に、イエス様が私を捜し、見出してくださったからなのだということです。同じルカの福音書の 15 章には、百匹の羊の内、失われた一匹を見つけるまで捜し歩く良い牧者のことが語られていました。イエス様はまさにそのように失われた私たちを捜して救うために、このクリスマスの時、この世に来て、そして私たち一人一人を見出してくださいました。今日、自分がこのように神のもとに立ち返って大きな喜びに生かされているのは、イエス様が私を捜して見出してくださったからなのだということをもう一度覚えて心からの感謝をささげたいと思います。そしてザアカイのような喜びの応答をささげる者でありたいと思います。

またイエス様は今なお失われた者を捜す働きを続けておられます。信仰をまだ持つておられない方で今日ここにおられる方々は、まさにイエス様が今、捜し求めておられる方々であるということなのではないでしょうか。そのイエス様の声に聞いて、その祝福にあずかる方々になっていただきたいと願います。またすでに救いをいただいた者たちは、失われた者を捜して救うイエス様の働きにともに加わるようにと招かれています。私たちも自分の経験を振り返れば、実際には色々な人との関わりを通してイエス様との出会いを導かれたはずです。信仰の先輩たちがイエス様の道具となって仕えてくださった働きを通して、「捜して救う」というイエス様ご自身の働きは私たちの上に成就しました。ザアカイ物語がこのように記されているのもザアカイが自分の救いの物語を大きな喜びをもって語り伝えたからでしょう。私たちもこのクリスマスの時、私たちのところに来てくださり、失われた者を捜し求めてくださったイエス様、そして今なお捜し求めていてくださるイエス様を証しし続ける者でありたいと思います。そしてイエス様の救いにあずかり、クリスマスを真の意味で喜び祝う方がさらに多く導かれることを祈り、そのために歩む者でありたいと思います。